

対して先生たちの反発があり配属将校と対立したんです。丁度、軍隊が強くなって、配属将校が中学あたりで実力をのばしつつあった時代ですからね。しかし、当時の先生方はリベラルな人たちでしたから反発されたいでしょうね。私なんか、生徒ですから直接じゃなく、ふんい気を感じた程度ですけれども。

名物先生

五高の二年の頃からは、無茶苦茶に本を読みました。それまで運動ばかりしていたので、乾いた砂が水を吸うように、本に夢中になったのです。夏休みや冬休みも、本を持って阿蘇や天草などに閉じこもって、読みふけりました。トーマス・マンの「魔の山」の二冊、ドイツ語の原書や短編集を読んだのは三年の夏休みでした。

五高の先生方には、いわゆる「名物」の先生が多かったのですが、私はとくにドイツ語の小島伊佐美先生にお世話になりました。先生のドイツ語の文法は正確無比で、授業で生徒にあてて、その答えがまちがっていても、ただ「いーえ」といわれるだけなのです。言いなおしても、また、「いーえ」と言われる。それで黙っていると、答えるまでただ黙っておられる。二十分でも三十分でもただ黙っておられるわけなのです。とうとう鐘がなり、その時間はおしまいになるの

ですが、次の時間、また同じ生徒にあてられ、生徒の方もいくらか意地になって答えないと、また二十分も三十分も黙ったきりで、とうとう根負けして答えた、というようなこともありました。しかし、こういうふうには徹底して教えられたので、後でドイツに留学したときなども、「おれのドイツ語の文法は正確なのだ」という自信みいたいものがありました。

軍隊経験

昭和十七年の九月に大学を卒業してすぐに、一六部隊に召集されましたが、しばらくして幹部候補生になって、当時の満州の經理学校を出て、一六部隊經理部や熊本師団の經理部にいました。終戦近くになると陸軍、海軍がぞくぞくと鹿児島にきたものですから熊本師団の經理出張所ができました。それで終戦の時は二〇六師団の經理部で鹿児島島の伊作というところにいました。

熊本師団の經理部にいた時に、沢田知事と一緒に仕事をしました。この前亡くなられた古庄次平さんもそうです。軍隊で三年生活して、いろんな人と接触して、いろんな経験をしました。特に熊本と鹿児島にいたので、熊本の人と鹿児島の人との気質のちがいがとてもはっきりわかって面白かったですね。おそらく大学を卒業してすぐに研究室に入っていたら知識は増えていたかもしれないけれど

せまい経験で物事を判断することになっていただろうと思います。やっぱり三年間の経験でえた人間についての知恵がしらずしらずの間に、その後の勉強の仕方そのものにもかなり影響したと思います。

熊本の大学

東京大学の学長というのは国立大学協会の会長をつとめる例になっていて、全国の国立大学のことをいくらかお世話しなくちゃいけない立場です。いま、ほとんど各県に大学が出来たわけですが、各県の大学とはどういう風になったか、いのかということには非常にむづかしい問題です。

二十年前くらい前、五高出身の東大法学部の末延先生や田中先生が、熊本大学の法文学部の強化にお手伝いしようということになり、私には併任教授になれということでしたので、十年くらい併任し、講義もしましたし、また東大を出た若い助教を送り込んだりしました。その大部分の人は、後に他の大学に移りましたが、それはそれでもいいのです。若い頃に熊本のようなところに行って、じっくり勉強するのはいいことだと思います。しかし、若い人にとっては、東京をはなれて熊本に行くのは、決心を要することなので、熊本の方でも、こういう人たちが十分勉強できるように、いろいろ配慮していただきたいと思います。

五高の頃は、五高は熊本の高等学校だという意識が、街の人たちの間にも強かったように思うのですが、熊本大学になってからは、そういう意識がいくらか薄れてきたのではないのでしょうか。また、先生方も、小島先生のように、じっくり腰をすえて学生を教育しようというよりも、中央志向的な傾向が強くなったように思います。これは日本の学問というもの、中央集権的なもので、やむをえない面もありますが、熊本は熊本で勉強することはあるように思います。留学などにしても、何も皆ヨーロッパやアメリカにだけ行く必要はないので、東南アジアや南米のことなど、東京の人々は手のまわらないところもあるのです。これからは日本の学問も、欧米のまねだけでなく、独自のものも出てくるし、また多様化してゆくでしょうから、やることはたくさんあると思うのです。

表九州

全体としていえば、私の子供の頃は熊本が表九州で、宮崎が裏九州という感じでしたが、最近では逆転して、宮崎が表九州で熊本が何となく裏九州みたいな感じになったように思うのですが、これはいくらか残念なこと、何とかこう熊本全体がもう少し生き生きといろんな領域で活動してもらったらいいなという感じがします。



熊本に住んで三十年になりますが、その間の変化は驚くばかりです。昭和二十六年に初めて熊本に来たときは、自動車も舗装道路も少なく、交通信号機もありませんでした。上通りや下通りを自動車で通り、車をとめて買物ができました。今考えると、信じられない位です。

熊本に帰ると心ナゴミマス



アンドリュウ・エリス

東京の友人が、「熊本は田舎だ。」と言いました。最初私はそれに反論したい気持でしたが、「そう田舎だ、そしてそれは良い事だ。」と思いましたが、このめまぐるしい、あまりに物質主義的な社会にあって、私たちが本当に必要なのは田舎ではありませんか。真実の世界（自然を愛し大切にすることを、全ての人々を尊重し思いやる心）に帰る事が必要ではないでしょうか。所用で大都市に出かけるたびに、熊本に帰って来る時は、ほっと心がなごみ、熊本は私の第二の故郷であるとしみじみ思います。

球磨や小国の杉山、泰勝寺の美しい苔、大津街道の杉並木、花畑公園の楠等、自然の美に囲まれています。この恵まれた豊かな水と緑が破壊されない様守って欲しいと思います。

私は米国ミシガン州出身ですが、ミシガンは五大湖に囲まれ多くの湖が点在しているのです。州の自動車ナンバープレートには、ウォーター・ワンダーランドと書かれています。それで水の豊かな熊本に親しみを覚えます。水前寺や八景水谷の様に清水がこんこんと湧き、市民の飲料水を良質の地下水でまかなえる所は、世界でも珍しいでしょう。熊本の水は世界一おいしいです。

次に印象深い事は、緑豊かな自然で

民話



狐のお礼

南関町 久富 栄次郎

南関町庄寺の山に狐が住んでいました。

いたずら好きで人をばかしてばかりいるので、こいつを捕えてやろうというところになりました。

獵師の金作さんは、わが手で狐をしとめようと毎日山を探しまわって、ついに狐の穴を見つけました。

穴の前で火を焚いて松の葉をいぶしたからたまりません。狐はぱっと飛び出してきました。

「してやったり。」と金作さんが鉄砲をかまえてまさに発射しようとする、狐は急に立ちどまって「待って下さい。私は子供をはらんでいます。命だけはたすけて下さい。」と一生懸命頼みました。金作さんもかわいそうになって「今から、いたずらするなよ。」と鉄砲をおろして助けてやりました。

それからというもの、金作さんはいつも大狐ばかりでした。

ある日、いつものようにたくさんのお物をもって山から庄寺へ出る坂道を降りていきますと、急に目の前がボーッとみえました。びっくりしているとかすみの中に芝居小屋があらわれました。あつげに取られて立ちすくんでいると、きれいな娘がやってきて「私は先日、助けていただいた狐でございます。いま芝居が始まるので見せて下さい。」と言って金作さんを上座にすえて、次から次へと馳走ができました。ご馳走を食べながら、おもしろい芝居を楽しみ、金作さんはすっかり満足して家に帰りました。

獣でも子供をはらんでいるときは、撃つてはいけないそうです。